

評価結果一覧

1 作品収集・保存事業の評価

【評点5】

〈過去から現在に至る写真・映像文化を未来に継承する美術館〉

(1) 優れた写真・映像作品の計画的・効果的な収集

【評点5】

○評価の理由

- ・『収集の基本方針』があり、平成 18 年策定の『写真作品収集の新指針』があり、さらに「随時見直し」が盛り込まれている点を高く評価する。
- ・収集の基本方針及び新指針はともに妥当なもので、維持会員による独自財源を確保している点も高く評価できる。
- ・50～60 歳代の作家が重点収集対象となっていることを知り、彼らの活動初期に写真展が一般的になってきた印象があるので、そうした記憶が雲散霧消しないですむことに安堵している。
- ・寄贈も含め、目標の 200 点を大きく超えている。歴史的資料、新規重点作家、映像作品など、バランスへの配慮も見られる。
- ・現在、購入予算の削減を余儀なくされている国内の美術館の状況を鑑みると、比較的購入しやすい写真とはいえ、予算確保と計画的な収集への努力が見られる。
- ・写真家によってシリーズ作品の購入枚数に差があるのが気になる。高額な写真家の枚数を抑えているとしても、日本の写真文化のセンターとして期待される写真美術館として、3、4 点ではやや寂しい。
- ・初期写真史の作品及び関連資料の収集が着実に進行していることは、心強い。
- ・平成 18 年度から復活した作品収集は、ほぼ軌道に乗った。

○指摘された課題・提言等

- ・予算に制約があるならば、募金を募るとか、写真愛好家の参加型のやり方を取り入れるなど、開かれたユニークな試みが身近に感じられるのではないか。
- ・これは基本的に都や財団からの予算に帰する問題であり、自治体の財政が厳しい折、無尽蔵に収集予算を求めることはできないにしても、特徴を持った館への評価がもうすこしあってもよいように思われる。
- ・財源の違いによる購入の棲み分けも妥当と考えるが、「東京都写真美術館購入」分については、実質的に「黎明期の写真」コレクションの形成につながっているようなので、この点を積極的に表現し、コレクションの一つの柱としたらどうか。つまり、新指針の第 2 項「黎明期の写真のように」という曖昧な表現ではなく、「黎明期の写真コレクション」という位置づけを与えてよいのではないか。
- ・今回の重点作家収集は 3 名程度であり、今少しの努力が必要か。
- ・「映像資料」と「映像作品」の位置づけが不明瞭である。基本方針では前者の下に

後者が位置するが、今後、「映像作品」は多様化し、増加するはずで、この扱いを収集計画の中で明確にしておく必要がある。

(2) 的確な作品管理 【評点4】

○評価の理由

- ・ 作品管理は予算と人手をどの程度使えるかで決まってしまう部分が多い。他機関との連携による保存・修復の研究が熱心に行われている。
- ・ 外部機関からの保存についての問合せに応じている点も評価できる。他機関への手助けという意味で重要なことであり、写真美術館にとっても経験の蓄積となると思われる。
- ・ 大学などの研究・教育機関とも連携し、資料保存・修復の研究を継続して実施していることを評価したい。
- ・ 写真専門館としての研究成果は外部からの期待も多い。
- ・ 収蔵庫の管理状況など問題ないように思えるが、他の美術館、海外の写真専門美術館の管理状況との比較ができないため留保をつける意味で「やや」とした。
- ・ 目標水準を高く設定し、的確に作品管理がなされているとりわけ、温湿度のきめ細かいチェックと管理は、他の多くの美術館よりも遙かに優れている。
- ・ コロタイプ印刷の保存性に関する研究にあって、連携相手との関係を推進していることは、重要である。

○指摘された課題・提言等

- ・ 専門性を発揮・継続するためにも、適切かつ恒常的な人員配置は必須である。
- ・ 担当学芸員（研究員）が非常勤 1 名であることは不適切で常勤にすべきではないか。
- ・ 外部からの問合せが増加し、丁寧に答える姿勢は高く評価したい。これは今後の写真美術館の重要な業務と見なすべきで、それにふさわしい体制作りを将来計画に入れてよいのではないかと考える。
- ・ 作品の保存の大切さを訴えながら、作品のお宝としての価値をもっとアピールしてもよいのではないか。

(3) 写真・映像に関する幅広い調査・研究

【評点4】

○評価の理由

- ・「映像」という日々変化する捉えがたい対象を相手の調査研究は困難であろうが、収集・展示に関してと同様、この点についても写美の方針はあまり限定的でないので（できるところからやってゆくという印象）、かえって成果が上がっているのではないか。
- ・それぞれの学芸員等の個人的関心を伸ばすかたちで実施することが一番の実りを生むと思うので、今後も館の中で風通しよく民主的に調査研究を継続して頂きたい。
- ・年報に論文等のリストが載っているのが良い。外部からも興味深いし、お互いに刺激になるだろう。
- ・多岐にわたりそれぞれ目のつけどころがとても良い。
- ・各学芸員がのびのびと楽しく仕事をしているのが感じられる。楽しく続けてほしい。
- ・展覧会カタログの執筆や館内での講演など、本業まずありきだが、学芸員の知見や研究成果を館外で社会還元することも美術館の学芸員の役割である。
- ・学芸員の方たちが、やや忙しすぎるのではないかという懸念も抱いている。
- ・講演や公開講座など一般向けに行われる教育活動は重要なのでこれを積極的にを行い、独立させて明示し、「学会発表等」という括りの中に入れたい方がよい。
- ・インターン生にも『紀要』に論文発表の機会を与えていることを評価したい。
- ・受賞した金子隆一氏をはじめとして、館内の研究指導者レベルでの研究発表は本格化している。他の学芸員にあっても鋭意努力をしてほしい。

○指摘された課題・提言等

- ・すべての図録の論文に目を通したわけではないが、写真美術館を日本の写真文化のセンターとして考えるならば、回顧展などの機会には、その後、その写真家を論じる際の基本となるような決定的な論者が期待される。それに十分に答えられているかどうか。
- ・「論文等」と「学会発表等」とうたいながらも、前者には新聞・雑誌記事や他館の展覧会図録への寄稿文、後者には講演や公開講座が多く、十分な研究とその成果発表の機会が確保されていない印象を受ける。
- ・研究は写真美術館のすべての活動の前提であり根幹であるという自覚を全スタッフが共有し、その実現に向かってほしい。
- ・年報で、学芸員の大学での非常勤講師やシンポジウムへの参加も「調査研究」の項目に入っている点に少し違和感を覚える。「教育・啓蒙」といった活動ではないか。
- ・歴史文化財団管理の美術館・博物館の間で、学芸員の異動があるが、その際は調査・研究の継続性の観点からの配慮も十分になされるべき。

2 展覧会企画の評価

【評点4】

<質の高い写真・映像文化と出会う美術館>

(1) 来館者数の目標達成と集客増

【評点5】

○評価の理由

- ・集客数と展示や美術館の善し悪しが必ず連動しているとは個人的には思わないが、順調に増加していることはポジティブに評価すべきであろう。
- ・経済が後退すると、公衆は教養主義によってでなく本当に観たい展示にのみ足を運ぶのではなかろうか。
- ・自主企画展では、サルガド展と恵比寿映像祭の実施が集客と新たな来館者開拓に結びついたのではないかと思う。
- ・20万人を割り込んでいた年間入場者数が、ほぼ倍増で安定しているのは見事というほかない。特に（ジブリ展などではなく）日常的な努力の積み重ねによって達成された点を高く評価する。
- ・来館者数の数値目標(38万人)は十分に達成している。
- ・初めての来館者が多いということは、新たな観客が開拓されたということにほかならず、そうした彼らの足を再び美術館に向けさせることに最大限の努力を払うべきだろう。
- ・42,8万人は、ほぼ満足できる水準。類似の博物館や美術館が軒並み減少したなかで、写真美術館は健闘した。

○指摘された課題・提言等

- ・昨今デジタルカメラやパソコンの普及にともなって写真を撮影したり加工したりできる人々が増加しているので、写真美術館にとっては集客数を伸ばすチャンスであると思われる。
- ・きちんと基本方針に基づいてやっているなので、来館者が増えて行くのだと思う。それを確認しながら次の段階へのステップアップも期待したい。
- ・当該年度の「交流を広げ、つながりを強める美術館」という目標に対する実績が『年報』10ページの説明であるとすれば、達成は不十分といわざるをえない。
- ・写真美術館がつながる先の「地域」や「コミュニティ」とは何であるか、何であるべきかを再考すべきである。
- ・また、リピーターが少ない点も検討すべき課題だろう。

(2) 質的な満足を得られる機会の提供 【評点4】

○評価の理由

- ・個人的には写美の展覧会はかなり（8割以上？）観ているが、大抵満足できる。
- ・展示フロアが複数あるので、会期がずれている幾つかの展覧会をまとめて観られることも便利である。
- ・個人的好みになるかもしれないが、一定の時間的地域的範囲の作品の「総花的」な展示はかえって印象に残りにくい。個人作家（特に女性）の個展などを小規模で観られれば嬉しい。
- ・当たり外れがないという安心感というか、またそれだけでもなく刺激もあり、大いに揺さぶられて満足感が得られる。
- ・コレクション展、自主企画展、誘致展など年間20以上の多様な展覧会を実施している努力を買いたい。
- ・誘致展は、評価が分かれる場合も散見されるが、コレクション展は毎回テーマを設定し、企画展に劣らず、コレクションへの興味を喚起できるよう構成している学芸員の自覚を評価したい。
- ・「夜明け前」や「旅」といった収蔵展は、新たな視点を提供するなど、満足のいくものだった。
- ・「恵比寿映像祭」は前回より、飛躍的に質の高いものになったと思われる。10日間で終わってしまうのは残念。
- ・コレクションをもとにした「日本写真開拓史」や「旅」シリーズは、地味ではあるが、写真美術館ならではのユニークな企画であり、こうした展覧会を積み重ねることで存在感を増すことにつながるだろう。
- ・「プレスカメラマンストーリー」展は、ポスターが誤解を招いたのではないか。実際には戦争写真が充実しており、「戦争と報道」について考える絶好の機会を提供できたのではないかと惜しまれた。

○指摘された課題・提言等

- ・年間を通して、展覧会はバラエティに富み、充実していた。強いていえば、いずれも作品主義・作家主義が強く、楽しさに欠けるという印象を持った。
- ・「森村泰昌」展のように規模と会期の枠をはずした試みをのぞき、全体に、企画展や企画性の強い収蔵展は展覧会数が多く、会期も短いように思う。（実は、写真美術館ほど内覧会の多い館はあまりない）。これが学芸員を多忙にしている一因なのではないか。作家の力量に左右される部分の大きい個展以上に、企画者の力量や蓄積が出やすいグループ展で、その懸念を抱く。
- ・「ビゴー」展の開催を高く評価する。ビゴー撮影の日清戦争写真の扱いが小さすぎたのが残念であったが、こうした写真に隣接する領域の展覧会を（写真展ではないからという理由で）物怖じせずに、今後も積極的に展開してほしい。な

お、同展は、明治美術学会、美術史学会、文化資源学会などと連携すれば、さらに「質的な満足を得られる機会」を提供できたに違いない。学会との連携も今後の課題だろう。

- ・前年から続く日本写真開拓史（「夜明け前」）では、全国の機関との連携を提起し、新しい可能性を開いた。ときおり、こうした方向の企画を試みてほしい。

(3) 良質な映画の誘致と上映 【評点3】

○評価の理由

- ・これまで観たなかで、「アフガン零年」（平成16年4月～6月）とシリム・ネシャット（第2回恵比寿映像祭）がすばらしかった。両方とも写真美術館で上映しなければ観られなかったと思うと、感謝の念にたえない。
- ・映画の予告のポスターを見ているといつも見てみたいという映画を上映していると思う。
- ・テーマがきちんと設定されていて方向性が定まっているような、そうでないようなラインナップだが、写真美術館のなかの映画館としてはいいかと思われる。
- ・「アート&ヒューマン」のテーマを考慮すると、特にアートとの関連が深いわけではないが、「生誕100年のマザー・テレサ映画祭」の注目度は高かったのではないか。
- ・商業映画館ではなかなか上映できない、自主制作の質の高い映像を上映することは、社会教育施設としての美術館の使命ともいえるので、多様なプログラムを評価したい。
- ・作品の選択については、写真美術館らしいものとそれほどでもないもの（マザー・テレサなど）が混在しているように思う。ただそれが即悪いともいえない。
- ・努力の跡はみえるが、わが国の映像文化にインパクトを与えるような映像の上映とまではいえない。
- ・「アート&ヒューマン」のコンセプトが十分に浸透しているとはいいいがたい。恵比寿映像祭の進化に注力してほしい。

○指摘された課題・提言等

- ・今後もアンテナを広く高く掲げて、私たちが知らない良い作品を発掘して見せて頂きたい。そのためには写真美術館側と外部（配給会社など）が連携して作品を選定するのが望ましいと思う。
- ・アートに近い作品を作家ごと観たい。都現美でのレベッカ・ホルンのように。
- ・「カジュアルな岩波ホール」のような存在を目指す方法もあるかと思う。
- ・外部のプロデューサーを中心に上映作品を選択されているという事実はより広く公表されるべきだと考える。
- ・写真美術館がこの活動を行う理由が実はよくわからない。上映映画の選定が外部に委託されており、不明瞭ではないか。

- ・選定された映画は良質で、かつ相応に入場者を得ているようだが、写真美術館の活動全体の中での「実験劇場」の位置づけは再考されてもよいのではないか。

3 教育・普及事業の評価 【評点4】 ＜写真・映像文化の普及と新たな創造を支援する美術館＞

(1) 対象者に応じて多様なプログラムの提供 【評点4】

○評価の理由

- ・ 展覧会、ワークショップ、講演、トークなど、現状でも多様なプログラムが行なわれていると思うが、一般論でいえば、特にワークショップにおいては、対象が子供や親であっても、おおげさにいえば現代写真の地平が見通せるようなレベルが望ましい。
- ・ 担当者がつねに「判りやすさ、面白さ」と「映像の芸術性、思想性」との間を行き来していることが必要である。
- ・ 大学生以上の対象相手には、とにかく現場を見せてほしい。
- ・ 何か気がつく、いつも多彩なプログラムを提供している。
- ・ 自主企画展における学芸員やアーティストのトークも、定期的を実施しているが、写真美術館ならではのワークショップは重要である。
- ・ 暗室体験やコマ撮りアニメーション、鶏卵紙プリントワークショップ、BWプリントワークショップなどの体験型学習は、写真への基本的興味を深める。
- ・ 10日間の恵比寿映像祭でのトーク、パフォーマンスは、従来の写真美術館の教育プログラムの枠を広げる効果があったと思う。
- ・ 月3回近い学校利用をはじめ、他の公立館と比べても活発なのではないか。
- ・ スクールプログラムの31件など、教育・普及の充実に資するところが大きかった。ただし、施設の規模からみて、もう少し、拡大の可能性はある。

○指摘された課題・提言等

- ・ 限られたスタッフで、よく健闘していると思うが、『年報』26ページに示された活動歴からは、場当たりの印象を受ける。
- ・ たとえば、修学旅行生の受け入れにはどのような姿勢で臨んでいるのか。
- ・ 中高校の写真部や美術部の受け入れにはどのような姿勢で臨んでいるのか、方針と体制を確認することが必要だろう。
- ・ 待ちの姿勢なのか、積極的に参加者を誘致するのかを内部でよく話し合ってもらいたい。
- ・ 写真美術館は展覧会数が多く、かつ普及活動も多様だから、教育・普及活動の優先順位を、何を基準にどうつけるかが問われる。

(2) 図書・情報の収集と公開の促進 【評点5】

○評価の理由

- ・日本でほとんど唯一の写真と映像美術館として、図書資料の充実と公開は社会的義務であろう。
- ・それが可能かどうかは、これまた予算、人員の要因で決まってしまう部分が大きいとは思いますが、現状では、閲覧、レファレンスなどのサービス業務がきわめて誠実に行なわれていると感じた。
- ・図書室も独自のやりかたで公開しているところはすごいと思う。
- ・大切な資料をおしげもなく提供することこそ開かれた図書館であり、ネットの蔵書検索も利用者にとってうれしい限りである。
- ・写真関連の図書室の地道な活動は、写真研究者のみならず、一般の方への情報の提供、写真への興味の深化に貢献している。停滞させることなく、継続してもらいたい。
- ・ネットで蔵書検索ができるようになって、非常に利用しやすくなった。
- ・ユニークな活動である。現行の方針のまま、さらに購入予算や収蔵スペースの増大を真剣に考えるべきで、こうした活動の発展が今後の写真美術館の存在意義を疑いなく高めるはずだ。
- ・日本一の写真関連図書館として、ほぼ望ましく機能している。

○指摘された課題・提案等

- ・コピー料30円については、他館もほぼ同水準だと思われるが、事業仕分けのなかでも議論となったように関心も高く、値下げの方向での検討もありうるのではないか。
- ・図書にかぎらず、写真展のポスターやチケットなどの附属資料まで、一般の図書館や美術館では手が出せない領域をしっかりとカバーすべきである。
- ・しかし、そうした資料の収集を進めれば、さらなる隣接領域の資料が収集すべきか否かという検討対象となってくるから、現行の作品資料収集の基本方針の中で、図書資料の収集方針を明確にする作業が必要となる。
- ・図書室の性格に関する認識を館員が共有すべきである。
- ・映像関係図書収集、閲覧については戦略化する必要があるだろう。

4 広報事業・情報発信の評価 【評点4】 ＜写真・映像文化の拠点として貢献する美術館＞

(1) 効果的な広報・宣伝 【評点4】

○評価の理由

- ・ 恵比寿駅からのスカイウォークで見る写真美術館の垂れ幕は、人々に恵比寿ガーデンプレイスが単なる消費の場所ではないと感じさせる機能を果たしていると思う。
- ・ 写真美術館はJR駅から行く人がほとんどなので、今後もデザイン性、メッセージ性において目を見はるような宣伝が欲しい。年報はカラーが美しく、判りやすい。
- ・ ポスター、ちらし、パンフレットはとても重要なアピールになる。その点、写真美術館のその類は面白い感覚で斬新で良いと思う。
- ・ 展覧会の内容の知名度もあると思うがポスター、ちらしなどの影響が来館者数にもリンクしてると思われる。
- ・ 広報・宣伝は多分に予算に左右されるものだが、公立美術館としては、3500万円の広報事業費を計上しているのは、稀有といえる。
- ・ 記者懇談会の実施など、努力は評価したいが、大都市の美術館としては、こうした広報活動は必然と判断したい。
- ・ 記者懇談会は他館にはない試みで、館長の見解を直接知る機会として、あるいは館全体の方針を知る機会として有意義である。
- ・ 展覧会等の日常の広報についても、報道向けのギャラリートーク等の設置だけでなく、ふだんから、迅速、的確、きめ細かな対応が、他館と比べても際だって優れていると感じている。
- ・ 広報会社に任せるケースが少ないのも、館が責任をもって広報する、という姿勢の現われと理解でき、好ましいと考える。
- ・ ポスターのデザインは、個々には高い水準に達していると思うが、年間を通して振り返ると、いずれも美しく上品にまとまてはいるもののインパクトに欠けるという印象を抱く。これは、展覧会企画に関する評価で、楽しさに欠ける点を指摘したことに通じる。
- ・ 広報誌 eyes は表紙写真のインパクトが目立つ。

○指摘された課題・提案等

- ・ 記者懇談会やギャラリートークなどプレスへの対応はきめ細かく、おそらく相応の効果을上げていて、今後も続けてゆくべきである。
- ・ 写真美術館1階ロビーに大量に置かれた展覧会ちらしに代表される従来型の紙媒体による広報物は、本当に効果を上げているのかという疑念を持つ。

- ・電子情報による発信に重心を移し、紙媒体については費用対効果の点から検証すべきではないか。
- ・40万人超という入館者を念頭に考えると、恵比寿地区への発信だけではなく、諸博物館、美術館スペースなどでの積極的な広報が必要だろう。

(2) インターネット等を用いた情報発信の推進 【評点4】

○評価の理由

- ・HPなどは割に普通。個人的にはもっと洗練されていてもいいかなと思う。一般の人々への伝達機能を果たすためにはあまり「アート」っぽくない方がいいのかもしれないけれども。
- ・よく写真美術館のホームページは見ているが、とても見やすくて利用しやすい。
- ・ブログも学芸員が身近に感じられ、もっと他の学芸員のもあればうれしい。
- ・HPの活用では、恵比寿映像祭HPが突出していたと思う。
- ・日本語では学芸員のブログから紀要、図書検索まで、展覧会情報や基本情報のみではなく、楽しみながら写美の情報を得る工夫がされている。
- ・情報公開の点でも、ポリシーや予算なども含めバランスよく情報を提供しているのは評価に値する。
- ・現在のHPは、構成・デザインともシンプルで、わかりやすく使い安いものだと思う。
- ・コレクション検索のリンクが2010年12月からとなっているのは、やや惜しい。早く利用できるようになることを願う。
- ・ウェブサイトからの判定はうまく構成され、情報公開度は比較的高く、過去のものも含めた情報量は適切で、これに対するアクセス数も多く、全体として高水準である。
- ・上述した紙媒体による広報を再検討する一方で、インターネットによる情報発信をさらに一層充実させるべきだろう。
- ・月刊61万PVという数字は満足できる。(アクセス結果についてのコメントを) ブログを開いてみたが、まだぎくしゃくが残っている。もう少し、気軽に読みやすく。

○指摘された課題・提案等

- ・検索のしかたが悪いのかもしれないが、動画、音声をもし使っていないのだったら、控えめに導入してみてもいいのでは。
- ・英語の情報をもう少し充実できないか。日本の写真専門館として韓国、中国などの多言語化を望みたい。
- ・写真美術館の歴史と理念を表明する「開館の経緯」に言及するページにも、一次資料に相当するものを示して、アーカイブ化を進めてよいのではないか。

- ・「保存科学研究所だより」と「学芸員みっちゃんのブログ」が、いずれもが学芸員の発信する情報とは思えないほど異なるスタイルをとっており、その他の学芸員からの情報発信がなく、この点のみがひどくアンバランスで、違和感を抱いた。
- ・学芸員の顔が見えるウェブサイトを目指すのか否か、全体として「楽しさ」や「親しみやすさ」をさらに加味する方向を目指すのか否か、内部でよく検討すべき課題だろう。

5 来館者の視点、企業・団体の参加、ボランティア事業、地域連携の評価 〈開かれた美術館〉 【評点4】

(1) 良質なサービスの企画・提供 【評点3】

○評価の理由

- ・全体的に本当に工夫していると思う。常に来館者の方の声を聞こうとする姿勢やコミュニケーション、接点をもとうとする考えは評価できる。
- ・以前に比べるとカフェ、ショップの活用は改善していると思う。
- ・友の会のメンバー1500人確保は努力の成果であろう。
- ・来館者のニーズに対し様々な試みを実施していると感じるが、配布資料からは「来館者からの意見を常に把握し、迅速なサービスに努める」方法がみえなかった。
- ・一般利用者の評価を直接聞いたことがないので、分からない部分も多くあるが、以前に比べ、向上していることは確かだと思われる。
- ・カフェ、ショップとも、リーマンショック後も売り上げがあまり下がっていないところを見ると、定着ぶりがうかがえる。
- ・ショップの品揃えが優れており、来客数が著しい。

○指摘された課題・提案等

- ・来館者の視点としては、1階のエントランスがやぼったい。具体的にはチラシのラックや映像ホールの受付用テーブルなどをもっとすっきりしたものにして欲しい。臨時の張り紙などがうっとうしいと思ったこともある。
- ・ショップやカフェ、2階のカフェがしゃれているのに残念。あまり広くないのでよほど気をつけないとごたごたする。
- ・雨の日にスカイウォーク乗り口まで建物の中を歩いて行きたいことがあるが、建物の構造のせい、すっきりとした行き方がなかなか判らない。
- ・ハード面が魅力に欠け、かなり致命的な印象を抱いてしまう。1階ロビー、階段、エレベーターから降りて展示室へと向かう空間がちぐはぐで、これから展

覧会を見るという気持ちを高めていかない。

- ・制服を着た案内人の配置がよくないのではないか。
- ・カウンター越しで距離があり、よそよそしく、身近に接するという感じにならない。
- ・カフェの位置が不利なので、いま少し来客を促す方向を模索してほしい。
- ・賑わいのある恵比寿ではあるが、南の隅のほうはサービス機能においてやや劣っている。

(2) 企業・団体等の参加促進 【評点5】

○評価の理由

- ・維持会員リストはとても立派だと思う。企業だけではなく、文化事業、大学などが入っていることが写真美術館の評価を上げるのに効果的なのではないか。
- ・今後も各方面の維持会員が増えることを期待している。
- ・維持会員制度はその企業自体にも好感がもてる。
- ・芸術分野にもきちんと理解があるというステータスが感じられて、これからもそういうふうにしてほしいと思う。
- ・企業・団体の参加は突出している。
- ・十分な成果を上げていると評価できるし、維持会員に対するケアも適切十分である。
- ・維持会員の勧誘は230法人とずば抜けており努力の結果は如実に現れている。
- ・経済状況の悪化のなかで、よく水準を保っている。

○指摘された課題・提案等

- ・維持会員は、制度設計も運営の現状も、申し分のないものだと思う。逆に、都や財団がこの制度を当たり前のことと考えるようになることについては、懸念を覚える。
- ・これを機に、日本の企業人が、単なるおつきあいではなく、本当の意味で、美術や美術館に関心をもってもらいたいと思う。

(3) ボランティアの参画促進 【評点4】

○評価の理由

- ・友の会員やボランティア参加は「文化的な刺激を受けたい」という気持が大きいと思う。ボランティアの交流会や友の会向けの内覧会実施は評価する。
- ・ボランティアの活動をむやみに広げず、スクールプログラムを中心に実施し、研修を充実させているのは妥当である。
- ・実態がどんな感じかデータだけでは判然としない点はあるが、ワークショップ

やスクールプログラムにも関わっているのは、かなり積極的な参加なのではないか。

- ・ボランティア参画には、技術上・事務上の困難があるものだが、ほぼ適切に運用されている。

○指摘された課題・提案等

- ・他館との比較はわからないが、ボランティア登録者数 74 名というのは足りているのだろうか？
- ・ボランティアの応募が多いと聞いている。写真美術館でボランティアをしているという満足感と、ボランティアをすることで逆に教えていただけることが多いのでそういう魅力を積極的に表に出して続けてほしいと思う。
- ・1人あたりの年間活動回数が3回は少ないのではないか。
- ・ボランティアの満足度調査を実施すべきだと考える。
- ・1人あたりの参加回数を平均で5～6回程度にまで、かさ上げしてほしい。

(4) 地域との連携強化 【評点3】

○評価の理由

- ・恵比寿ガーデンプレイスには人が集まるので今後も連携を充実させてほしい。
- ・地域との連携を頭にいれて活動することは自らをも活性化させる動きがあると思う。
- ・オープンな協力、連携は重要と思う。
- ・行政側は地域との連携を望むだろうが、写真美術館の性格上、特に地域ではなく全国の写真ファンに向けての発信に集中したほうがいいのではないか。
- ・大都市の美術館は地域との連携が見えにくい。「あ・ら・かるちゃー」は情報提供や協同広報で活用できると思う。
- ・あらかるちゃー散歩地図なるものの存在を初めて知った。これがどれくらい親しまれているのか判断の難しいところである。
- ・サルガド展の講演会を学校で実施されたのは、評価できると思う。
- ・上野や六本木地区と比べ、文化施設の集積度の低い地区で、どのようなことが期待されるのか、なかなか難しいように感じる。
- ・『年報』30ページを見るかぎり、十分な成果を上げているとは見せない。

○指摘された課題・提案等

- ・恵比寿ガーデンシネマに来る人が1階のホールにも来るようになるといい。
- ・恵比寿では恵比寿ガーデンプレイスと地域が分断されているような印象もあるので、もし周辺に商業ギャラリーなどあるなら、連携マップなど作れば足が向くかもしれない。

- ・流行の「地域連携」に飛びつく前に、そもそも写真美術館がつながる先の「地域」や「コミュニティ」とは何であるか、何であるべきかを再考すべきである。
- ・渋谷区とその教育委員会など、自治体の参画がいまひとつなので、可能性を探る必要があるだろう。

6. インフラの改善

【評点3】

<ミッション達成のための必要な基盤の整備>

○評価の理由

- ・写真美術館は初めから専用の建築を確保できたという点ではラッキーであったが、建築デザインとしては、駅側からのエントランスが狭い、各フロアの天井が低い、階段が急で狭いなど、やや「ちまちま」した印象がないでもない。
- ・1階ロビーの空間デザインが不明瞭で、写真美術館に第1歩を踏み入れた際の印象を混乱させる。
- ・美術館の設備の営繕や更新と消防訓練は当然だが、営繕の予算確保は容易ではないのだろうか？
- ・「業務を効果的に運営する」ことが、予算上の協賛、助成、現物供与のことなのか？あるべき図録やポスターの印刷費が常に不足しているようにも見える。
- ・評価の対象が、事業実施数や入場者数、予算削減といった目に見える数値に傾きがちである中、「ミッション達成のために必要な基盤整備」を掲げたこと、極めて重要である。
- ・整備内容を見る限り、きめ細かな維持管理をされているものと理解する。

○指摘された課題・提案等

- ・全体として相当な努力を重ねていることは明白だが、写真美術館として充実した活動継続のために、職員の健康管理はもとより、後進を育て、職員の志気を高める職場環境整備は重要。それには適切な人員確保と配置、相互コミュニケーション、健全な予算確保が不可欠だが、そうしたインフラ整備は果たしてどうなのだろうか？
- ・2階のカフェ、三田橋側の入り口上の投影、2階への階段などが最近とてもすっきりしたので、それを全館に拡げてほしい。
- ・美術館来館者は非日常的な雰囲気も求めて来るので、日々建物を使う側では、安全や機能以外に美意識という観点から使い方に留意してほしい。
- ・今回の評価の外になるとは思いますが、写真美術館も、そう遠くない将来、大規模改修の機会があるかと思われる。現在のデザインは、完成時の時代を反映してか、少し装飾過多というか、商業施設的な印象がある。ゆっくりと、あるいは生き生

きと過ごすべき文化施設としては、落ち着きに欠ける嫌いがあるように思えてならない。大規模改修の折りには、ぜひそのあたりの点にも留意いただけるとよいかと思う。

- ・老朽化の問題は安全性に関わることなので最重要項目を順序だてて改善してほしい。
- ・設備の老朽化対策は適切に行われていると考える。いずれは抜本的な改築工事が必要になるだろうから、その計画も策定する必要がある。